

第153号
2018年
12月9日

竹
灯
籠
の
夕

十二月二十二日（土）

夕 5 時 〽 お 勤 め (正 信
夕 4 時半 〽 竹 灯 籠 点 灯

) 偈

「研修旅行雜記」

北村喜代信



津村別院内ロビ－

仏壮研修旅行は一年に一度の恒例行事ですが、普段の生活の場、宇賀野を離れて別の土地に行き、そこで梅鶯仏壮の皆さんと行動を共にし、一緒に時間を過ごすことは、今の私の楽しみの一つとなっています。企画立案頂いた森会長、田中薫さん、そして同行頂いた皆さまに心より感謝申し上げます。

ところで、旅行は私の趣味の一つでもあります。旅行はなぜ楽しいか、つらさや考えをみました。

別段、毎日の生活に不満があるからでもないし、何かから逃げ出したわけではない。むしろ、日々の生活に不満があるからで

津村別院内ロビー



坦々としてなんということもなく過ぎていきます。全体としてゆつたりと穏やかに物事が流れていくのが暮らしの基本となっていています。日々大過なく暮らしていくのもなかなか疲れることであります。そこで、時々ほんの少し自分でないものになつてみる。生活を忘れ、非日常の方へ行く。「広辞苑」は旅という言葉を一住む土地を離れて、一時他の土地に行くことと定義しています。旅は非日常であり、毎日の生活の枠から離れる非生活なのです。やはり、日常では味わえないことを体験するのは、よい気分転換になります。また、旬のものやその土地のものを美味しく頂いたり、有名な建築物やその土地の文化にふれたりできるのも魅力であります。旅は别人格へのいざないでもあります。私は、お力タイ律儀者と云われていますが、そんな私が旅に出ると性格が変わるのをしばしば体験します。最悪の場合は一旅の恥はかき捨て」とばかり行儀の悪い別の人格が出てきます。免感が付きまといまふ。旅には放と、いろいろなありますが、結局のところ旅行によつて普段の自分からの解放が少しだけ実現するこ

「研修の旅」に参加して

この度、法輪寺様のお誘いにより、正行寺から三名がご一緒させて頂きました。

よく歩き、よく食べ、よく学んだ一日の大阪研修となりました。改めまして、御礼申し上げます。

西本願寺津村別院（北御堂）と東本願寺難波別院（南御堂）を参拝し、この二つの御堂の真ん中を通っているのが、御堂筋であるところ初めて知り、また、大阪城が石山本願寺の跡地に建てられてあるということも再認識し、浄土真宗ゆかりの地巡りを満喫しました。台風被害の倒木を横目に見ながら、ポランティアガイドさんの丁寧な案内で、大阪城の広さが体感できました。天守最上八階まで登る階段では足が限界にきていました。

その夜は海鮮鍋に舌鼓を打ちながら、一日目の疲れを吹き飛ばしました。

翌日は、あべのハルカスからの眺望を楽しむ、梅田での昼食バイキングに備えるため、心斎橋通りを歩きに歩き通しました。

同行の酒居さんが付けていた万歩計は、昨日から、すでに、一万八千歩を超えていました。

個人的には、久しぶりに訪れた大阪で、楽しく、充実した学びの中で、足も鍛えられ、胃袋も満たされ、頭脳がクリアーになりました。

梅鶯仏教壮年会の皆さまに感謝しつつ、会の益々のご活躍を願っております。

題材法話

本年もこうして報恩講をお迎えできましたこと有り難いことと存じます。

浄土真宗の門徒にとって

は「ほんごさん」と呼ぶ最も親しみのある年中行事で

すが、もとこの「報恩講」は、親鸞聖人のひ孫に

当たられる本願寺第三代門主の覚如上人が、親鸞聖人

の三十三回忌の法要に当たつて「報恩講式」という文

書を著され、その中で報恩講の意義と、報恩講の法要

の形式を整えられたのが始まりであることは、これが始

でも度々お話しをしておられます。

覚如上人が示された報恩講の意義を改めて申します

と、それは親鸞聖人への心として三つにまとめられて

います。

一つには、親鸞聖人が生涯をかけて、お念仏のみ教えをお示し下さったこと。

二つには、そのみ教えよって私達一人一人が悦びの

報恩生活を送らさ

せて頂いていること。そして三つ目は、その悦びを一人でも多くの人に伝えてゆくということです。

○「報恩」ということ

そこで「報恩」ということについて、少しお話しを

させて頂きます。

「報恩」は一般的に「恩に報いる」と読み、何かを

仕向けて頂いた方にお礼を言ったり、頂いた金品を差

し上げるといったイメージがあります。

もちろんそのようない行為も間違いではないですが、

「報」という字には「並びたり」と一緒になっている離れな

「き」と一体となっている離れな

「い」、「願われている」という意味もあるそうです。

意味もあるそうです。

浄土真宗の報恩講の「報恩」はこちらの方の意味合

いで、読み方も「恩に報い

る」ではなく「恩を報（ほ

う）じる」と読む

む方が正しいのです。

○報じるとは

こんなたとえ

話があります。

ある見知らぬ町で道に迷って帰る駅の方向が分からなく、通すがりの人に駅の方

向を尋ねました。

「この道をまっすぐ行つて

二つ目の角を右に曲がって

・・・」と教えてくれました。

た。

この教えて下さった方へ

の「報恩」とはどういう行

為になるかです。

もちろん「有難うござい

ました」と丁寧な御礼を言

うことも大切です。時には

持ち合わせのお菓子差し

上げることもあるかも知れ

ません。

けれども御礼を言ってお

きなから、「やはり私はこ

ち云つて、教えてもらつた

と云つて、教えてもらつた

方角とは違う方角へ進んだ

としたらどうでしょうか。

教えた人の親切がすべて

無駄になり、どんな言葉

で御礼を言つたとしても、

その方の恩に報い

たことにはなりま

せん。

教えられた通り

の方向に進んでこ

の方向に進んでこ

○親鸞聖人への報恩

このような報恩の意味合

いを考える時、覚如上人が

示された前述の三つの意義

の内、やはり二番目の意義

が大切になるのではないか

と思います。

もちろん一番目の親鸞聖

人がお念仏の教えをお示し

下さったことは根本中の根

本で、これがなければ浄土

真宗はあり得ません。

けれどもこのことを讃え

るのには思想家や哲学者の中

にも沢山おられるでしょう

が、それで終わるならば親

鸞聖人に対する報恩とはな

りません。

やはり大事なことは、こ

の私が「願われている」その

ままの私になる」ことなの

でしよう。その時初めて親

鸞様は微笑んで下さるので

はないでしようか。

そしてその時には、自ず

と第三番目の行為が生じて

くるのでしよう。

この本来の意味に思いを

馳せて、ご一緒に報恩講を

勤めさせて頂きたいと思ひ

ます。

報恩講住職法話より

